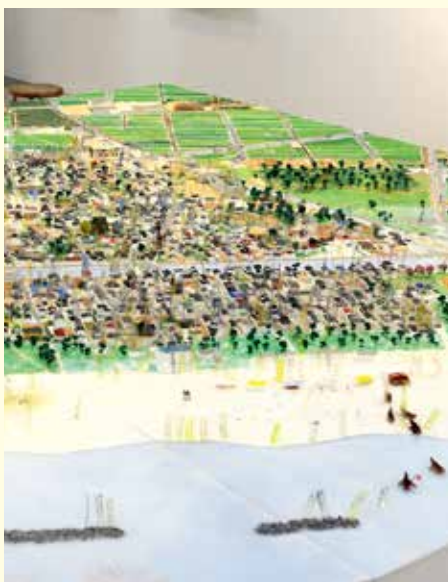


震災の記憶を、形にして伝えたい 「せんだい3・11メモリアル交流館」

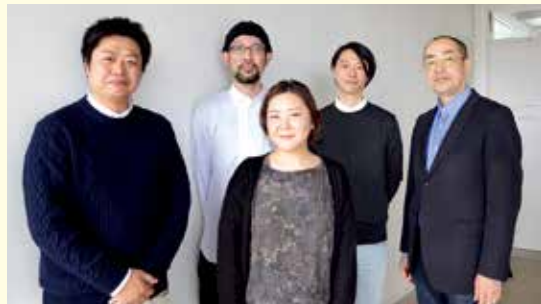


震災前のまち並みを模型で復元



◀ふせんに書き込んだ思い出が地図の一部に

▼企画・制作に携わった皆さん。右から本江さん、岩澤さん、長内さん、松井さん、小山田さん



2月13日に全館開館した「せんだい3・11メモリアル交流館」

(表紙、6ページ参照)。施設内の展示物の企画や制作は、地元デザイナー、東北大学の教員らが特別なプロジェクトチームを編成し、震災の記憶の継承に関わるさまざまな市民団体の方とアイデアを出し合って行われました。

東北大学大学院工学研究科准教授の本江正茂さんは「東日本大震災とは何だったのか、一人一人が考え、その記憶を分かち合う場にした、という思いで検討してきました。1階の壁面には沿岸部の立体地図を配置し、津波の浸水域等を分かりやすく展示。2階には、被災状況や復興の道のりを伝える常設展示を設置しています」と教えてくれます。同工学研究科助手の岩澤拓海さんは「ここは津波の被害を一方的に伝えるだけの施設ではありません。『交流館』という名前の通り、震災を経験していな

い方や子どもでも、誰もが自由に思いを語り、考えられる場所になるよう、随所に机や椅子、資料を置き、メッセージを残せる短冊も置いてあります」と話します。



「休憩などで気軽に立ち寄ることができるよう、1階は明るい配色にしました」とは、デザイナーの松井健太郎さんと小山田陽さんの2階の一部の床には、被災した小学校の体育館の床材を使用したそうです。このほか、2階の企画展示では、震災前の思い出や記録を絵画や映像等で紹介しています。「震災から間もなく5年。今も皆さんの心の中に残り続ける震災への思いを形としてつないでいくため、この施設で行う催しに多くの方に参加してほしいです」と展示企画者の長内綾子さんは呼び掛けています。